

沖縄の視座から

● 23年目の5・15に思う ●

〈2〉

— 上原 誠勇

前回の項でも書いたように、沖縄と日本との政治的、歴史的関係性において、ほくたちのこの地はアイデンティティーを持ち得なかった。

明治以来の強力な皇民化教育もさることながら、二十七年間の不当な米軍統治下においても真の意味での近代に目ざめる事はできなかった。

大国の間で

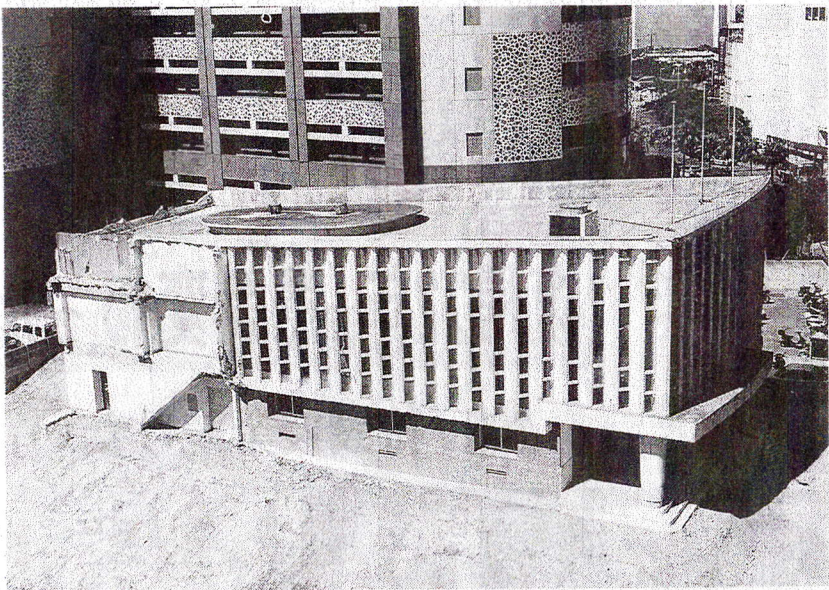
厳しい社会的制約の中でできる限りのデモクラシクな運動は謝花昇に代表されるようにあるにはあった。が、しかし大国の権力と力の前では赤子のような存在でしかなかった。また、時代的にも、皇民化、すなわち日本化する事が近代化できると信じ込みに違いない。これは歴史的に近代を手に入れる手段として大きなあやまちだった。

不本意な米軍統治下において

大国の権力にほんろう

旧立法院棟は歴史の象徴

も、近代のチョコレートが横文字の大量の物資とともに配られ、戦禍で傷ついた身をつるおすただけだ



耐久の問題などから移設保存も論議されている旧立法院棟

った。

返還運動も大国の力の間で「祖国」という冠を付けた、本質からはずれた運動の展開しかなかった。ここでも本場の意味でもデモクラシーは存在しなかったとほくたちは思っている。

不当を糾弾するごぶしのほく先が間違っていた。金網の向こう側の米軍ではなかったのだ。フェンスの向こうの人々は日米の国家間の条約で、正当な理由で任務についているにすぎない。糾弾すべきは、それを強要し、容認した日本だったのである。

ほくたちは思う、今日のように情報が発達した社会ならば国際政治の舞台で、大きな反響をよび、日本の身勝手な沖縄処分を国際社会が許さなかったはずである。残念ながら歴史には「もしも」があり得ない……。

ほくたちが5・15を考える時、もしも「か」が見えてこないのがある。ほくたちの歴史の認識や意識はこの地点からスタートしている。

歴史の証として

今、二十七年間にわたる米軍統治時代の象徴として残っている旧立法院棟が問題になっている。

建築物として価値があるかないか、雨もどがするとかどうとか、そんな事はどうでもよい事である。

問題は、日本と沖縄の関係性の不本意さ、主体性のなさ、不透明さ、権力とマイノリティーの歴史の証として残すべきである。

この立法院棟を残すか取りはらうかは、次代のウチナーンチュに、現在のほくたちが歴史をどのようになり認識したかを示すものであり、現在の場所に少々手を加えて代々まで残すべきである。

(画廊沖縄代表)

